

余寒厳しき折柄、宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお過ごしのこととご拝察申し上げます。

昨年末より正月 5 日間の日程で国境の壱岐・対馬に渡りつぶさに視察して来ましたが、日韓関係の冷え込みによる韓国人観光客の落ち込みは凄まじく、対馬のホテルはがら空きでした。

他国に依存した経済構造に慣れてしまうと、その国と摩擦や事件が生じた場合、観光産業等が対馬の如く影響を受けることになり、台湾や沖縄もその例に漏れず苦戦しているようです。

春節直前に発生した中国武漢のコロナウィルスでは 40 万人の訪日客が足止めされ、水際作戦で今のところは被害最小限のようですが、いつ何時「パンデミック」に化けるやも知れず、人の往来が自由になった昨今、宮崎でも感染者が見つかって何の不思議もありませんので、支部会員の皆様は手洗い励行とマスク着用で呉々もご用心下さい。

さて先月の自衛隊関連行事は 11 日、「高等工科大学宮崎県保護者会新年会」がひまわり荘で開催され、中川連隊長には誠に申し訳ありませんでしたが同日の「えびの駐屯地賀詞交換会」と重なり、今年も残念ながら昨年に引き続き欠席でした。

また 19 日は宮日会館に於いて、高名な憲法学者の西修先生を講師にお招きしての自民党宮崎県連主催「憲法改正研修会」に出席したところ 300 名近い大勢の参加者で、西先生の軽妙洒脱な講義は元より聴講者の質疑応答も大変熱のこもった内容と感じた次第です。

さらに 26 日は MRTmicc で「宮崎地方協力本部創立 65 周年記念祝賀会」が盛大に開催され、歴代本部長お三方も遠方よりご来宮の上、大いに旧交を温め合うことが出来ました。

ところで正月早々トランプ大統領がイラン革命防衛隊ソレイマニ司令官を殺害すると云うショッキングなニュースが流れ皆様も些か驚かれたことかと存じますが、小川先生のメルマガにその背景が解説されていますので、是非ともご一読賜りご意見など賜れば幸甚に存じます。

・イラン司令官殺害が正当化される条件

(静岡県立大学グローバル地域センター特任助教・西恭之)

イラン・イスラム革命防衛隊の特殊部隊(コッズ部隊)のガセム・ソレイマニ司令官は 1 月 3 日、シリアのダマスカスからイラクのバグダッド国際空港に到着した直後、乗っていた自動車に米軍の無人攻撃機のみ사일攻撃を受けて死亡した。

ソレイマニ司令官殺害の是非は、主に二つの基準で論じられている。基準の一つは、米政府が主張する**自衛権**の行使なのか、**それともフォード**以後の歴代政権が禁止してきた**暗殺**に該当するのかである。もう一つは、トランプ大統領が殺害を決定したとき、米政府と米軍は、**イランの報復**に備えていたのかという基準である。

しかしながら、**戦時国際法**(武力紛争法)の基礎には、**正戦論**という倫理的立場がある。正戦論とは、現実の戦争をより正しいものとより不正なものに分類する基準を示すことで、**戦争の開始と武力の行使の対象を制限**しようとする理論で、その主流は古代ギリシアに始まり、キリスト教がローマ帝国の国教となってから発展し、17世紀には世俗的な法学理論となった。

正戦論の下でソレイマニ司令官の殺害が**正当化される条件**は、上記の二つよりも**厳しい**。本稿では、ソレイマニ司令官が、**自衛権行使の対象**となる戦闘員であり、仮に米国が当面、**イランの報復**を封じることができた場合も、殺害作戦にさらに**求められる倫理的条件**を解説したい。

正戦論の倫理的基準は、戦ってもよい(始めてもよい)戦争の条件と、戦い方の条件に区別される。**戦ってもよい戦争の条件**は、次の5つがもっとも重視されている。

- 1) **正当な目的**があること。
- 2) 紛争を平和的に解決する合理的な努力が尽くされ、戦争が**最後の手段**となったこと。
- 3) **正当な権力**が戦争を許可すること。
- 4) 戦争の目的に比べて、戦争がもたらすと予測される**損害**が上回らないこと。
- 5) 目的が**達成可能**であること。

戦い方の条件は次の二つに大別される。

1) **戦闘員と非戦闘員を区別し、非戦闘員は攻撃目標にしないこと。**

2) **攻撃目標の軍事的価値に比べて、巻き添えとなる非戦闘員と非軍事物の損害を、不釣り合いに大きくしないこと。**

なお、戦ってもよい戦争の第4の条件も、戦い方の第2の条件も、**均衡性**と呼ばれるので、しばしば混同されている。

殺害作戦が**自衛権**の行使か、**暗殺**かという議論は、戦い方の第1の条件の問題である。端的に言えば、**ソレイマニ司令官**はイラクで米軍や米関連施設への攻撃を指揮していた**戦闘員**なので、米軍の待ち伏せ攻撃は**暗殺**ではない。

昨年10月、バグダッドの反政府デモは全国的な反イラン・デモに拡大した。ソレイマニ司令官はこれを親イラン民兵に実弾で鎮圧させる一方、**イラク国民の反感を米国へそらすため**、カタイブ・ヒズボラのアブ・マフディ・アル・ムハンディス司令官ら**親イラン民兵に、米軍・米関連施設への攻撃を指示した**。12月27日、イラク北部のK-1空軍基地がロケット弾で攻撃され、米民間人(通訳)1人が死亡した。米軍は報復としてカタイブ・ヒズボラ施設を空爆し、25人が死亡した。

カタイブ・ヒズボラの数百人は12月31日、バグダッドの**米大使館敷地に乱入**、検問所などに放火し、ソレイマニ司令官の名前を落書きした。**トランプ氏**は翌日(元日)、ポンペオ国務長官の持論だった**ソレイマニ司令官殺害を決断した**。1月3日、ソレイマニ司令官はムハンディス司令官と合流し、二人とも殺害された。

イランの英雄とされるソレイマニ司令官を殺害したことで、米国は**報復の応酬に陥るリスク**を取った。それゆえ、この作戦は、戦ってもよい戦争の条件として、**在イラク米軍の自衛以外に正当な目的があったのか**が問われる。

米国はそのような目的を示していない。正戦論は、報復の応酬ではなく、**平和の回復**を目的とする戦争しか正当化しない。しかし、2010年代のイラクやシリアにおける米国の戦略は、**モグラ叩き**のようにテロ組織を叩く一方で、テロ組織を生んだ状況は放置していた。トランプ氏が批判する「**終わりなき戦争**」を米国が続けてきたのは、米国にもイランなど近隣諸国にも受け入れ可能な

条件で平和を回復するための、外交交渉や復興支援が面倒だからである。

平和を回復するために国家テロの司令官を殺害するのであれば、その作戦は、全体として平和を実現する戦略に組み込む必要がある。そのためには、米国はイラクにおける目的とイランへの要求を明示し、親イラン民兵をイラク国民から孤立させつつ、争いを鎮めるための交渉をイランに提案し、イラクの復興を支援し、シリアにおける目的を整理し、以上に対する米国民と同盟国の支持を獲得する必要がある。米国にそれができないのであれば、イラクから撤兵することが、正戦論の結論である。

◎編集後記

・イランを叩いて北朝鮮を動かす

イスラム革命防衛隊特殊部隊のソレイマニ司令官の殺害に対する報復として、イラン側はイラク駐留米軍基地 2 カ所に対して 12 発の短距離弾道ミサイルを発射しました。ミサイルはイランが北朝鮮製のスカッド C を改良した、射程 750~800 キロのキアム 1 を含むと見られます。

この米国とイランの緊張については、第 3 次世界大戦にエスカレートするのではないかとセンセーショナルな報道もありますが、もう少しクールに眺める必要があると思います。

米国への報復について、イラン側は米国の軍事施設を攻撃すると声明しています。これは、イランが背後で支援しているヒズボラなどの武装勢力を使った無差別なテロなどは行わないということです。同時に、イランは核開発を無制限に進めるとも述べていますが、これは核合意に米国が戻るまで視野に入れた、特に EU 諸国を意識した意思表示だと考えてよいでしょう。もちろん、いずれも国際的孤立を避け、イランの国家建設を進めていくための基本的な戦略です。

米軍が駐留している基地への間髪を入れない弾道ミサイル攻撃は、ただちに報復した姿を激高するイラン国民に示し、それをもって国連や EU 諸国の調停や米国との交渉を受け入れた場合にも、国民の怒りがイラン指導部に向けられることを避ける措置だった側面があるのです。

このメルマガが配信される頃、米国はイランに反撃しているかもしれません。その場合も、軍事施設に限定したピンポイント攻撃になる可能性が大きいと思います。

米国によるソレイマニ司令官の殺害については、米国は北朝鮮をも視野に入れていたと考えてよいでしょう。今回のような軍事行動をとる場合、たったひとつの目的のために大きなリスクを冒すことは考えにくく、さまざまな目的を視野に行動することが少なくないからです。

米国は昨年12月22日、11月12日に実施した米韓軍事演習のうち、金委員長とおぼしき北朝鮮要人を拘束したシナリオの写真を公表しました。金委員長が最も怖れているとされる斬首作戦です。

これに対して、北朝鮮は年末ぎりぎりに4日間という異例の長さで朝鮮労働党中央委員会総会を開き、時間稼ぎの姿勢に終始しました。期限としてきた12月31日まで米国の回答を待つ姿勢を見せたのです。それでも米国側の回答がないとみるや、恒例となっている新年の辞も行わないなど、表面的には強硬姿勢への回帰を装って見せたのです。

そうしたところに、絶妙ともいえるタイミングでのソレイマニ司令官の殺害です。

果たせるかな、金正恩委員長は7日、暗殺の危険性が囁かれるのを無視するかのように、公の場に姿を見せたのです。これは、北朝鮮の国内向けには米国の恫喝に怯んでなどいないことを示しているのですが、その実、丸腰の姿を見せることによって米国と対決するつもりはないというメッセージを発したのです。

マスコミ報道は、イランならイラン、イラクならイラクの出来事にだけ焦点を合わせることになりませんが、ソレイマニ氏を殺害した米国の立場から、あるいは報復を口にするイランの立場から眺めると、違った景色が見えてくるのです。以上（小川和久）

令和2年2月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦